広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ドイツ語における動詞接頭辞のテリック性表示機能について
Author(s)	三上，宗一
Citation	ニダバ , 22 : 61 - 69
Issue Date	1993-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047241
Right	
Relation	

論　文

現代ドイツ語における動詞接頭辞のテリック性表示機能について

三　上　宗　一

1．はじめに

現代ドイツ語は非常に発達した造語法を有しており、独立した単語どうしによる複合語形成の他、接頭辞や接尾辞などによる派生法が大変充実している。動詞の場合はその中でも前綴りと呼ばれる接頭辞が重要な役割を果たしているが、その多くは元来副詞などの独立した品詞であったものがその独立性を弱めたものであり、意味的にもその本来の語彙的意味を比較的保持しているものから、ほとんど失ってしまったものまで、個々の動詞ごとにその程度は一様でない。特に本来の語彙的意味を失った接頭辞は基礎動詞のアスペクト的特性に何らかの変更を加える機能を有している場合が多く、今回取り上げる「テリック性(telicity)[1]」もそのような機能と関わりの深いアスペクト的特性の一つである。

本稿で取り上げるテリック性とは、ある動作がその実現のために明確な目標点を必要とするものであるか否かに関する純粋に意味論的なカテゴリーであるが、その実現の仕方は言語により様々である。現代ドイツ語に限って言えば、動詞の接頭辞がそれとの関連で取り上げられることが多い。例えばComrie(1976)は、kämpfen と*er*kämpfen 、essen と*auf*-essen の違いを例にあげ、接頭辞の付加された側を何らかの終結点へと到る過程を指示するものとみなした[2]。テリック性はその他の言語表現とも関係が深いが[3]、現代ドイツ語の場合にはその中でも特に動詞の派生法が重要な役割を果たしていると言えそうである。

今回の小論では、これまで断片的にしか取り上げられることのなかった現代ドイツ語の動詞接頭辞とテリック性との関わりについて検討してみたい。そしてどのような意味の接頭辞がテリック性の指標として使用されうるのか、個々の接頭辞を具体的に取り上げながら考察していきたい。ただし、多数の接頭辞を全て検討することは不可能なため、今回はあえていわゆる非分離の接頭辞と、前置詞に由来する接頭辞の一部に対象を限定する。

2．「テリック性」について

テリック性とは、もともとは動詞の語彙的意味に内在するアスペクト的特性の一つとして、Garey(1957) によって提案されたものであり、その根幹をなしているのは「テリック(telic)」対「アテリック(atelic)」の対立である。彼はこれを語彙的なアスペクトとと

らえ、文法的なアスペクトとの関係に関して次のような説明を行っている(P. 106-110)

1) Pierre arrivait. (テリック・半過去)
ピエールは到着しようとしていた。

2) Pierre est arrivé. (テリック・複合過去)
ピエールは到着した。

3) Pierre jouait. (アテリック・半過去)
ピエールは遊んでいた。

4) Pierre a joué. (アテリック・複合過去)
ピエールは遊んだ。

1)は、過去の一時点においてピエールが目的地へ向かって移動していたということを表しているが、実際にそこへ到着したか否かについては不明であり、その後なにかの事情で到着できなかったことも考えられる。そのため、1)が成立しても結果としては2)の成立は含意されない。それに対して、3)は単に「遊ぶ」という動作が過去の一時点において行われていたということを表しており、たとえその動作が途中で中断しても、「遊ぶ」という動作そのものの成立には何の影響もない。そのため、一旦3)が成立すれば結果として4)の成立も当然含意される。この点をふまえて、Garey(1957) は動詞の意味がその成立に明確な目標点(goal)を必要とするものであるか、必要としないものであるかに従って動詞を分類しようと試み、前者をテリック動詞(telic-verb)、後者をアテリック動詞(atelic-verb)と呼んだ[4]。1)〜2)のarriver(到着する) はテリック動詞、3)〜4)のjouer(遊ぶ) はアテリック動詞である。

Garey は動詞がテリックであるか、アテリックであるかを判断するために次のテストを提案している。'if one was *verb*ing, but was interrupted while *verb*ing, has one *verb*ed?' この*verb*の部分に当該の動詞を入れて、答えが'Yes' であればアテリック動詞であり、'No' であればテリック動詞である。

一方、Comrie(1976)はGarey におけるテリック対アテリックの対立を動詞のみでなく、むしろ文全体の表す状況(situation) における意味的特性とみなした(P. 44)。

5) John is singing. ジョンが歌っている。

6) John is making a chair. ジョンが椅子を一つ作っている。

6)の状況においては、一つの椅子の出来上がる時点という明確な目標点が存在し、そこへ到達した時点ではじめてJohn has made a chair. ということができる。この時点において「一つの椅子を作る」という作業は完結し、それを越えて作業を続けることは出来なくなる。一方5)においては、ジョンは任意の時点で歌を中断することができ、歌い始めた歌を最後まで歌い切ったか否かにかかわらずJohn has sung. ということができる。このようにComrieは、明確に限界づけられた目標点を持つ'make a chair' のような状況をテリック、そうでない'sing' のような状況をアテリックとみなした。

Comrieによれば、テリックな状況というのは目標点のみでなく、そこへ到る過程を含むものでなければならない。そのため、例えば'John reached the summit.'という文は、頂上へ到る過程の最終部分にのみ言及しているため、テリックとはみなすことができないという[5]。このような状況をVendler(1967)は'achievement' 達成と呼んでいるが、Comrieはこれとテリック性とを区別するために、テリックの場合には、未完了の動詞形式を使用した場合、終結点に未だ到達していない意味を出すことができるとしている。上の文では進行形による未完了の表現'John is reaching the summit.'は頂上に到達するまでの過程を表現していないため、テリックとはならないという。

このように、状況がテリックであるか否かは単に動詞の意味だけでなく、その他の文構成要素やテンス・アスペクト・ムード等の文法的特性、また文脈などの要素によっても様々に影響を受ける[6]。そのため以下で取り上げる動詞の意味レベルでのテリック性も、それのみで文全体の表す状況のテリック性を決定づけるという性質のものではなく、むしろその原型となるものといった方が近いのではないかと思われる[7]。

3．現代ドイツ語の動詞分類

Helbig & Buscha(1970)は、現代ドイツ語における動詞分類の基準の一つとして動作相(Aktionsarten)をあげており[8]、それによればドイツ語の動詞は意味的に継続（未完了）動詞（blühen咲く，essen食べる，laufen走る、等）と完了動詞（aufblühen咲き出す，erjagen狩猟で取る，reifen熟する，öffnen開ける、等）に大別される。前者は事象の経過を区切ることも段階づけることもなく、開始や終了にも触れることなく表現する動詞であり、後者は事象の経過を時間的に段階づけたり、一つの事象から他の事象への移行を表現したりする動詞である。後者には具体的には次のような動詞グループが含まれる。

(1)起動動詞。事象の開始を表現する。

aufblühen，einschlafen寝入る，entflammen点火する、等

(2)終了動詞。事象の最終段階または終了を表現する。

erjagen，verblühen花盛りが過ぎる，durchbohren突き抜ける、等

(3)変化動詞。ある状態から他の状態への移行を表現する。

reifen，rosten錆びる，sich erkälten風邪をひく、等

(4)作為動詞。新しい状態を引き起こす作用を表現する。

öffnen，senken沈める，sprengen爆破する，schwärzen黒くする、等

この分類はごく大雑把なものであり、実際には動詞固有の意味によってさらに細分化されうる。しかしこれらの動詞例からは、接頭辞が全てテリック性と関連しているわけではなく、その機能の一部を占めているにすぎないことが明らかである。また、基礎動詞の段階ですでに意味的にテリックである場合も当然存在するため、接頭辞の機能を一義的にテリック性の表示とみなすことには無理がある。多くの場合、接頭辞には本来的意味や機能が

あり、テリック性はそれに付随する特性として、ないしは本来的意味から転じた結果生じたものとしてとらえることが可能であるが、専らテリック性のみを表現するための接頭辞は存在しないと考えられる。なお次章で扱うのは主として接頭辞の本来的な意味からの転義が中心となるが、語義レベルとはいえ辞書記述のみで接頭辞やそれを付加した派生動詞のテリック性を詳細に分析することは困難であることを指摘しておく必要がある。以下、いわゆる非分離の接頭辞から順に見ていきたい。

4．テリック性との関連における接頭辞の意味と機能

4．1．いわゆる非分離の接頭辞

be-〔他動詞化、付与、添加、状態の招来、継続、等〕[9]

本来は近接を表す前置詞bei と関連の深い接頭辞である。自動詞を他動詞に変換し、また名詞、形容詞を他動詞に変えてその性質を対象に付与する意味を表すことができる。そのためbegegnen等の若干の例外を除き、大部分が他動詞である。また他動詞に付加される際には、その格支配を変化させることがあり、その場合にはある行為を行う対象となる領域全体が目的語となることから、ここにテリック性との間接的関連を指摘することができよう[10]。(cf. begießen, belegen, beliefern, bepflanzen, bestreuen, usw.)

ent-〔対向、離脱、起源、開始、復元、除去、等〕

基本義のよく保持された例が中心であり、テリック性との関連は不明である。

er-〔内から外への方向、開始、結果、完了、終結、破壊、到達、獲得、等〕

語源的にはur- と関連が深く、「内から外へ」が基本義であるが、上記のようにその意味範囲は大変広範にわたっている。また、後述のver-などと重なる部分も多い。広義の完了動詞を作る機能が発達しており、その場合動作や状態の開始の意味を表すことが多い。(erblühen, erwarmen, erfrischen usw.) テリック性との関連に関しては、動作の結果・完了の例(erschlagen, erschöpfen, ertrinken usw.)の他、特に目標への到達・獲得の意味を持つ例のあることが注目される。(erjagen, erkämpfen, erkaufen, erreichen, ersteigen, erstreiten, usw.)

ge-〔共在、集合、完了動詞形成、等〕

元来はラテン語のcon-とも関係のある接頭辞で、共在、集合の意味を持つ(gefrieren, gehören, usw.)他、広義での完了動詞を作る働きがある。しかし現代語ではその数はあまり多くはなく、上述のer- 等の接頭辞にその機能を譲りつつあるようである。これは一つには、ge- が今日ではむしろ完了分詞を形成する接頭辞として広く用いられてきていることと無関係ではないであろう。[11]

ver-　〔代理、経過、通過、阻止、消滅、消費、錯誤、除去、移動、逆、完結、結果〕

３つの異なった起源の接頭辞がここに合流していると考えられているため、意味は非常に多彩である。Brinkmann(1962) によれば、この接頭辞における終了の意味は、物や生命の「消滅(Vergehen)」(vergehen, verblühen usw.)あるいは人間の「消費(Verbrauch) 」(verbrauchen, verzehren usw.) 「根絶(Vernichtung) 」(vernichten, vertilgen usw.) 等によりもたらされるという[12]。また、獲得の意味が認められる点はテリック性の観点からも興味深い。(verhelfen, verschaffen usw.)

zer-　〔分離、分解、破壊〕

基本義がよく保たれた例が多い。しかし比喩的意味への転移が生じると、テリック性の観点からは興味深い例も散見されるようになる。(zerarbeiten, zersorgen usw.)

miß-　〔失敗、逆、誤謬〕

基本義は良く保持されている。テリック性との関連は不明である。

4．2．いわゆる分離の接頭辞

ここに属する接頭辞は非常に多いため、便宜上前置詞に由来するものに対象を限定したい。それは、これらが比較的使用頻度が高い上に、本来的な意味が薄れたり変化しているものが多いことを考えてのことである。これらの前置詞の多くは実際は副詞起源である。

ab-　〔分離、除去、獲得、遮断、下方、模写、取消、転移、完成、減少、損傷、過剰〕

上記のように派生義は多彩であるが、「分離、離脱」がその基本義である。テリック性と関連ある用法もこの基本義から生じる。(ableben, absitzen, abnutzen usw.)また、特に終了に注目していると思われる用法も存在する。(abrechnen, abschließen usw.)

an-　〔対象への接近、接触、到達、隣接、前進、開始、持続、等〕

「対象への接近、接触」が基本義である。そこから到達の意味を帯びることはあるが、(ankommen usw.) 他の接頭辞と比べると基礎動詞のテリック性を強める機能はあまり顕著ではなく、むしろ「着手、開始」等の意味を表す例が多いようである。

auf-　〔下から上への方向、刺激、開始、復元、完遂、展開、集積、起きている状態〕

基本義としては「下から上への方向」を意味するが、そこから多彩なニュアンスが派生している。テリック性との関連においては、上記のaufessen等の他、「完全な処置(vollständige Erledigung)[13] 」を表す例が多い。(aufarbeiten, aufbrauchen, aufreiben, auftragen, aufzehren, usw.)

aus- 〔外で、へ、逸脱、離脱、選択、排除、徹底、消滅、到達、根絶、付与、等〕

基本義としては「中から外への方向」を表す。Brinkmann によれば、この接頭辞による終了の意味は目標への到達によってではなく、動作を遂行するための力が行為の中で果てていくこと(daß die Kraft zur Ausführung der Tätigkeit sich im Tun erschöpft,)によってもたらされるという[14]。そしてausklingen, ausruhen, ausschlafen, ausweinen 等の例があげられている。また、ある領域からの完全な除去(vollständige Beseitigung)の意味の例としては、ausradieren, auswaschen 等の例があげられている。

ein- 〔外から中への方向、逸脱、包囲、消滅、到達、開始、反復、静止の状態、等〕

前置詞inと関係の深い接頭辞で、「外から中への方向」を意味するが、そこから「ある状態への到達」や「消滅、破壊」等の意味も派生している。もっとも、その場合でも基本義が完全に薄れてしまっているかどうかは疑わしい。(einschlafen usw.)

以下のbei-, mit-, nach-, vor-, zu-においては、テリック性との関連は不明である。

bei- 〔付加、助力、同席〕

mit- 〔共同、同伴、関与、共通、同時、等〕

nach- 〔後続、追加、反復、近接、目標への運動、劣等性、譲歩、追随、模倣、等〕

vor- 〔前方へ、で、前もって、模範として、優位、保持、現出、等〕

zu- 〔閉鎖、被覆、接近、合流、追加、継続〕

4．3．いわゆる分離・非分離の接頭辞

これらは分離する場合には具体的意味を、分離しない場合には比喩的な意味を表す場合が多いとされるが、テリック性に関しては（若干の例外を除き）特に両者で違いがあるとは認められない場合が多いようである。

durch- 〔通過、貫通、克服、分割、完遂、徹底／浸透、貫徹による損傷、消費、等〕

「通過、貫通」等の基本義を持つ。そこから「完遂、徹底」等の意味も派生してくる。aus-同様、durch-もある領域(Bereich) を含意するが、aus-と異なりこの領域には固定した境界(feste Grenze)があり、しかも動作の経過は明確な方向性を持っていてこの領域を横断する(durchmißt) ものとなっているという。またaus-の場合にはその領域は空(leer)であるのに対し、durch-の場合には満たされている(erfüllt) ともいう。(durchbringen,

durchführen, durchsetzen usw.）[15] また、Erben(1968) [16] は、'Er durchbóhrt das Brett.'を瞬間結果相(punktuell-resultativ)、'Er bohrte das Brett durch.'を局面的終結相(phasenhaft-konklusiv)、つまりより持続性を示すものとみているという。しかしこれがどこまで一般的な現象であるかはさらに詳細な検討が必要であると思われる。

hinter- 〔後ろ（裏、奥）に、へ〕
非分離の場合比喩的な意味となる。もっともhinteressen, hintertrinkenなどは、テリック性と関連している可能性はあるものの分離動詞である。

über- 〔上部、被覆、転覆、乗り越え、移行、残余／襲来、全面被覆、超過、移転等〕
「上部、被覆、乗り越え、超過」等の基本義を比較的よく保持している。テリック性との関連では、überziehen, übersehen など、全面被覆の例があることが注目される。

以下のum-, unter-, wider- については、テリック性との関連は不明である。
um- 〔包囲、流布、迂回、回転、反転、転倒、転換、喪失／包囲、周囲、迂回〕

unter- 〔下から、を、に、多者・二者間の混在、介入〕

wider- 〔反射／反対、対抗〕

5．おわりに
今回取り上げたのは非分離接頭辞及び分離接頭辞の一部であり、その中でも特にテリック性と何らかの関連が認められるもののみを扱ってきた。しかし実際には、この中にも基本義の完全に消失したものから、ある程度保持しているものまで様々なものがあり、しかもそれがどのような転義を経てテリック性の指標となってきたかについても個々の接頭辞ごとに一様でないことが明らかとなった。ところで、接頭辞のついた動詞は多くが（広義の）完了動詞であるが、これは動詞の意味にある種の限界点（無論終結点とは限らない）が存在しているものとしてとらえることができる。それで接頭辞の機能を、基礎動詞の意味を様々に限定したり、修飾したりすることととらえるならば、同様に限界点の付与もそのような限定機能の一部をなしていると考えることができる。今回扱ったのは、その中でも特にある種の目標点を基礎動詞の意味に設定する機能であるということができよう。またテリック性そのものについても、すでに指摘したように文レベルのテリック性は動詞の意味特性だけでなく、目的語や副詞類などの意味特性とも深く関わっているため、今後はそれらの非動詞的項目とテリック性との関わり、また動詞の意味との相互作用という観点からもさらに検討を加えていく必要があると思われる。

注

1．山田(1984)では「目標性」と訳されている。

2．Comrie(1976), P.46. 他にラテン語*facere* 'make, do', *conficere* 'complete' など。

3．山田(1984), 特に第V章を参照。

4．Garey は、テリック動詞を 'a category of verbs expressing an action tending towards a goal' と定義づけているが、ここで定義に 'towards' という表現を用いたことについてはDahl(1981)の批判がある。Dahl(1981), P.86参照。

5．Comrie(1976), P.47. なお、Vendler(1967) の説はComrieからの引用である。

6．目的語については次のような例があげられている。

a) John is singing a song.　　ジョンが歌を一曲歌っている。

b) John is singing songs.　　ジョンが歌を（何曲か）歌っている。

c) John is singing five songs.　　ジョンが五曲の歌を歌っている。

a)は一曲の歌を歌い終わるという目標点が存在するのでテリックであるが、b)はアテリックである。そしてc)は再びテリックである。もっとも、a)がもし一つの曲を繰り返し歌い続けているという状況を表しているのであれば、これもアテリックでありうる。そのため、状況のテリック性は文の構成要素の特性だけで一義的に決定できるとは限らない。さらに、Dahlはある状況が潜在的な目標点を有しているかどうかだけでなく、その目標点に実際に到達したかどうかを特性として重要視している。そして前者の特性をT-property、後者の特性をP-Propertyと呼び分けている。

	not-T	T
not-P	*I was writing.*	*I was writing a letter.*
P	(does not occur)	*I wrote a letter.*

このように目標点への実際の到達が特性として特に取り上げられている理由の一つは、言語によってはpotential な到達点とactualな到達点とが区別されている場合があることによる。詳しくはDahl(1981), P.83以降を参照。動詞の意味の場合は（上記の言い方に従えば）T－特性のみの関与が考えられるが、文（またはそれが表現する状況）においてはT－特性とならんでP－特性が重要な役割を果たしていると思われ、そこが語のレベルでのテリック性とは大きく異なる点となっている。

7．山田(1984), P.148 参照。そこでは基底アスペクトという表現が使われている。

8．Helbig & Buscha(1970), P.72-75.

9．括弧内は独和大辞典(1985)〔小学館〕や木村・相良独和辞典(1974)〔博友社〕等を参

考に主な意味をat randum に列挙したもの。なお、斜線は分離・非分離の境界を表す。

１０．具体的には次のような格支配の変更がある。

d) die Bilder an die Wand hängen　　絵を壁に掛ける

e) die Wand mit Bildern behängen　　壁（一面）に絵を掛ける

f) Milch und Brot auf den Tisch stellen　　テーブルにミルクとパンを並べる

g) den Tisch mit Milch und Brot bestellen　　（上とほぼ同じ）

d)とe)はともに「壁に絵を掛ける」意味を表すが、e)では「物を掛ける」という動作の対象自体（この場合は壁）が目的語となっている。掛ける物体自体を目的語としたd)の場合と比較できる。e)の場合、動作が対象の全面に及ぶ意味を持つとされるが、これがどれほど一般的な現象であるかについてはさらに検討を要する。

１１．相良(1965), P.75. 相良(1979), P.118.　参照。

１２．Brinkmann(1962), P.256.

１３．同上 P.255.

１４．同上 P.255.

１５．同上 P.256.

１６．Erben(1968), P.75.　本文の引用は山田(1984)より。

参考文献

Brinkmann, H. (1962). *Die deutsche Sprache.* Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.

Comrie, Bernard. (1976). *Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.

Dahl, Östen. (1981). 'On the Telic/Atelic Distinction', *Syntax and Semantics,* 14 *Tense and Aspect.* 79-90.

Erben, J. (1968(77)). *Deutsche Grammatik.* （引用は山田(1984)より。）

Garey, Howard B. (1957). 'Verbal Aspect in French', *Language,* 33. 2. 91-110.

Helbig, Gerhard & Joachim Buscha. (1970). *Deutsche Grammatik.* Leipzig: Verlag Enzyklopädie. （日本語訳：G. ヘルビヒ／J. ブッシャ著　在間進訳 (1982) 現代ドイツ文法, 三修社. ）

Vendler, Z. (1967). 'Verbs and Times', *Philosophical Review.* 66. 143-160. （引用はComrie(1976)より。）

三好助三郎(1977), 新独英比較文法, 郁文堂.

相良守峯(1965), ドイツ語学概論, 博友社.

相良守峯(1979), ドイツ文法（改版）, 岩波書店.

桜井和市(1968), 改訂　ドイツ広文典, 第三書房.

山田小枝(1984), アスペクト論, 三修社.